

江木欣々女史

長谷川時雨

青空文庫

大正五年の三月二日、あたしはかんだあわじちよう神田淡路町のえぎけ江木家の古風な黒い門をくぐっていた。

旧幕の、ぶげやしき武家邸の門を、そのままであろうと思われる黒い門は、それより二十年も前からわたしは見馴なれているのだった。わたしは日本橋区とおりあぶらちちようの通油町おがわまちというところから神田小川町の竹柏園ちくはくえんへ稽古けいこに通うのに、この静な通りを歩いて、この黒い門を見て過ぎた。その時分から古い門だと思っていたが、そのころから、江木氏の住居すまいかどうかは知らなかった。

「この古い門のなかに、欣々女史きんきんがいるのですかねえ。」

連立つれだった友達は、度の強い近眼鏡を伏せて、独り笑えみをしてい
た。

「冷灰れいかい博士——そっちの方のお名には、そぐわないことはない
けれど」

友達が言うとおりであった『冷灰漫筆』の筆は、風流にことよせて、サツと斬りおろす、この家の主人あるじの該博な、鋭い斬れ味を示すものだった。だが、今を時めく、在野ざいやの法律大家、官途を辞してから、弁護士会長であり法学院創立者であり、江木刑法と称されるほどの権威者、盛大な江木衷氏ちゆうの住居の門で、美貌びぼうと才気と、芸能と、社交とで東京を背負しよっている感のある、栄子夫人を連想

しにくい古風さだった。しかしまたそれだけ薄っぺらさもなかった。含みのある空気を吸う気もちであった。

たそがれ時だったが、門内にはいるとすつかり暗くなった。梅が薫かおつてくる。もう、玄関だった。

広い式台は磨かれた板の間で、一段踏んでその上に板戸が押開かれてあり、その畳に黒塗りぶちの大きな衝立ついたてがたっている。その後は三間げんばかりの総そう襖ふすまで、白い、藍紺あいこんの、ふとく荒い大形の鞞さや形がた——芝居で見える河内山こうちやまゆすりの場の雲うん州しゅう松江侯お玄関さきより広大だ、襖が左右へひらくと、黒塗金紋蒔絵まきえのぬり駕籠かごでも担かつぎだされそうだった。

「これはどうも——平民は土下座どげざしないと——」

と、平日は口重くちおもな、横浜生れではあるが、お母さんは山谷さんやの八や百善おぜんの娘であるところの、箏ことの名手である友達は、小さな体めに目め立ただない渋だいだつくりでつましく、クツクツと笑った。

気持ちの好い素足すあしに、小倉こくらの袴はかまをはいた、と五分ぶ苳がりの少年書生が横手の襖の影から飛出して来て広い式台に駈かけおりて、

「どうぞ。」

と、招いた客の人相をよく言いきかされて、呑のみ込んでいるように笑顔で先導する。

次の間には、女の顔が沢山出むかえた。

「さあ、こちらへ、さあこちらへ。」

招じられた客間は、ふかふかした絨じゅうたん毯たん、大きな暖炉ストーブに、

火が赤々としていた。

春には寒い——日本の弥生宵節句やよいよいぜつくには、すこしドツシリした調子の一幅いっぷくの北歐風の名画があつたともいえようし、立派な芝居の一場面が展開されるところともいえもしよう形容を、と見るその室内は有もつていた。

欣々夫人の座臥居住ざがの派手さを、婦人雑誌の口絵で新聞で、三日にあかず見聞みききしているわたしたちでも、やや、その仰々しい姿ポーズに足を止とどめた。

客間の装飾は、日本、支那、西洋と、とりあつめて、しかも破は綻たんのない、好みであつた、室の隅すみには、時代の好い紫檀したんの四尺もあろうかと思われる高脚たかあしの卓だいに、木蓮もくれん、木瓜ぼけ、椿つばき、福寿草な

どの唐^{から}めいた盛^{もり}花^{ばな}が、枝も豊かに飾られてあつた。大きなテールブルなどはおかないで、欣々女史はストーブに近くなかば入口の方へと身をひらいて、腕^{うで}凭^{かけ}椅子^{いす}のゆつたりしたのにゆつたりと凭^よりかかつていた。

彼女は、驚嘆したのであろう客の、四^よつぶの眼の玉を充分に引きよせておいて、やおら身じろぎをした。立上つて、挨^{あい}拶^{さつ}をしようとするのだ。

それまでに、わたしたちは、充分に見た。長く曳^ひいた引き裾^{ずそ}の、二枚重ねの褌^{つま}さきは、柔らかい緑色の上履^{スリッパ}の爪^{つま}さきにすつとなびいている、紫の被衣^{ひふ}のともいろの紐^{ひも}は、小高い胸の上に結ばれて、ゆるやかに長く結びさげられている。

胸の張りかた、襟の開きかた、それは日本服であつて立派な夜
ブニング会服のかたちだ。肩から流れる袖のひだなど、実になめらかに
 美しい。そして、胸のふくらみから腰から脚へかけての線など、
 その豊ほうじょう饒な肉体の弾力のある充実を、めざましく、ものの美
 事に示している。

切子きりこの壺つぼのような女性ひとだ、いろんな面を見せてふくぎつにキラ
 キラしている。

気の弱い男だったらあがつてしまふだろうな。と、その個性の
 高い香気を讚美しながら、ひきつける魅力の本尊どこは何処かと、彼
 女の眼を見た。

彼女の双眼は、叡智えいちのなかに、いたずらぎ氣を隠して、慧さかしげに

またたいていた。引き緊しまつた白い顔に、黒すぎるほどの眼だった。もとより黒く墨を入れているのでもなければ睫毛まつげに油をうけているのでもなく、深い大きな眼に、長すぎるほどな睫毛が濃かつた。眉まゆがまた、長くはつきりとしていて、表情に富んでいる。

——晴れ曇る、雨夜あまよの、深い暗やみの底にまたたく星影——そんなふうに、彼女の眼はなんにも、口でいわないうちに何か語りかけている。

彼女が立ったとき、椅子のふちにかけた手は、妖あやしく光った。指輪にしてはあまりにきらめかしいと見ると、名も知らないような宝石たまが両の手の指にも煌きらめいているのだ、袖口がゆれると腕輪の宝石いしが目を射る、胸もとからは動くどちらちらと金の鎖が

ゆれて見える。

彼女の毛は、解いたならば、昔の物語に書いてある、御簾みすの外へもこぼれるほど長いに違いないほどたつぷりと濃いのを、前髪を大きく束髪そくはつも豊かに巻いてある。

「こうして、ちゃんとしてお目にかかるのははじめてだけれど、あなたはあたくしのことはよく御存じだから——たったひとつあなたには聴いておいて頂きたいことがあるのよ。」

彼女はあたしの友達の、箏ことの名人の浜子はまこを見てつけたした。

「折角せつかくお招き申してもおさびしいといけないと思って、一番仲のよいお友達と御一緒にと申しあげましたの。」

一風も二風もある浜子は、その光栄を、軽く頭をさげておいて

先刻さつきのふくみ笑いをまだつづけている。

合あいきやく客は、ある画伯の夫人と、婦人雑誌で名の知れた婦人記者磯いそむら村女史だった。その人が、欣々さんからの使者にたつてて、出ぎらいだったわたしを引出したのだった。

「美人伝は、こちらがお書きになってらっしゃるから、いけないけれど——」

と、画伯夫人は、列伝体のものを、欣々女史の名で集めて残したらよかろうということをしきりに勧めた。

「そういえば——」

と、それが言いたい、今夜の招待まねきだとも知れぬように知れるように彼女は言いました。

「あたしのように、血縁のものに縁の薄いものがありましたらどうか、あたくしの母は、十六歳であたくしを生んだといいますが、ものご物ころ心づいてからは、他人に育てられましたのよ、だから、生うみの母にも逢わずに死なせ、その実母ひとの父親——おじいさんですわねえ、その人は、あたしが見たい、一目逢いたいと、それだけが願望だったというのにこれも隔てがあつて逢わずに死なせてしまいましたわ。実父の家とは、父の死後に、義母きようだい姉妹の交わりをするようになりましたけれど——」

その、哀れなはなしは、わたしの小さな美人伝に書いたことなのでみんな知ってはいたが、いたましい思いに眼を伏せていた。

悲しい事実も、さかり盛時の彼女には悲話は深刻なだけ、より彼女が

特異の境遇におかれるので、彼女は以前もとから隠そうとはしなかつた。ただしんぼうのならないのは、子供があるといわれることだと彼女はいつた。

「私に、子供があつてくれればですが、でも、ないものがあると
いわれるのは、嫌いやなものねえ。ある時、あなたの子だと、名乗つ
ているものがある、それが誠に美しい容貌ようぼうの男の子なので、誰
しもそれを疑わずにその者のいう通り、あなたの隠し児ごであるの
かと信じている。という、便りをきかせてくれたものがあつたの
です、ええ拵こしらえものですもの、でも、驚きました。」

さまざまな手配をして、ようやく分ぶん明みょうにしたのだといつて、
「美しい人に似ているといわれた心地こころよさから、つい名を騙かたつた

というのです。その子供も、別段わるい心ではなかったが、ふと欣々の子だといったら案外大切にされたので、一度口にした効果がわすれられなかったからだと言う訳なの。」

けれど、厭いやな思いもしたし、かなり迷惑もした。人をもつて警察の力も借りて、後のち々そういうことのないようにしてもらいはしたが――

「ほんとの子ならばしかたがないが誤伝で、いやなものねえ。」
白い袖の振りを、指輪の手でしごきながら話していたが、突いきな然り白い襦じゆばん袷あはせの袖をひっぱりだして、急いで眼にもつていった。その瞬間、たもちかねたような、大つぶの雫しずくがこぼれるのを見た。

まあと、深く息をのんで、感動を現わし示したのは合客たちだ

った。浜子は黙して眼鏡めがねをずりあげていた。わたしも気の毒さおもに面を伏せているよりほかなかつた。

その間に、電話の鈴ベルがひびいて取次がれた、彼女は輝く手でまぶたをおさえながら、

「あ、大臣の、尾崎さんの夫おくさま人からなら、どうか明みょう日にち御覽にお出いで下くださいまして。」

眼は濡ぬれていて、声は華やかだった。

「折角よるの夜を、こんな話をしてしまった——お雛ひなさまがおむずかりになるわ。」

用はもう済んだのだ、彼女は立って広間へ案内した。

広い客間の日本室を、雛段ななかばは半分ななかばほども占領している。室の幅

一ぱいの雛段の緋毛氈ひもうせんの上に、ところせく、雛人形と調度類が飾られてあつた。

「御覽あそばせ。まるで養子のように、誰も彼も、これは僕のだこれは私のだと、場所を占領して飾りますの、みんな一揃そろいずつですもの。いまに、室いっぱいになってしましますのでしようよ。あんまり見ごとだつて、それをまたいろいろの方が御見物にいらつしやるので——明日あしたは大勢さんをお招き申しましたわ。こんやは、あなたのためにだけよ。」

お雛さまの前に食卓がつくられてあつて、みんな席へついた。

「あたくしねえ、給きゅうじ仕じは、年の若い、ちいさい綺麗な男の子がすきです。汚ない、不骨ぶこつな大きな手が、お皿と一緒につきだされ

ると、まずくなる。」

ほんとに、その通りの少年が、おなじ緑の服を着て、白い帽子を頭において三、四人出て来た。

キュラソウの高脚杯グラスを唇にあてて、彼女はにこやかに談笑する。「今晚は、お雛さまも御洋食ですの。わざと、洋食にいたしましたのよ、自慢の料理人でございます。軽井沢かるいざわへゆきますのに連れてゆくために、特別に雇つてある人ですの。」

その、御自慢の料理人が、腕を見せたお皿が運びだされた。

「明日あしたは泉鏡花さんも見えるでしょうよ、あの方の厭いやがりそうなものを、だまつて食べさせてしまうの、とてもおかしゅうござんすわ。」

すっぽん
泥鼈ぎらいいな鏡花氏に、泥鼈の料理を食べさせた話に、誰も
彼も罪なく笑わせられた。

あたしは、鏡花さんが水がきらいで私の住んでいた佃島つくだじまの
うちが、海瀟つなみに襲われたとき、ほどたつてからとても渡舟わたしはいけな
いからと、やっとあの長い相生橋あいおいばしを渡つて来てくださつたこと
を思出したり、厭きらいとなつたら、どんな猛暑にも雷が鳴り出すと
蚊帳かやのなかでふとんをかぶつていられるので、ある時、奈良へ行
つた便次ついでに、唐招菩提寺とうしょうぼだいじの雷除よけをもつていつてあげたことを、
思出したりしていた。泉さんは、厭きらいといえば、しんから底から
厭かたいな方かただつたのだ。鏡花愛読者が鏡花会をつくつて作者に声援
していたころだつた。欣々女史も鏡花会にはいつて、仲間入りの

記念にと、帯地とおなじに機^おらせた裂地^{きれじ}でネクタイを造られた贈^{しるし}りものがあつたのを、幹事の一人が嬉しがつて、
「此品^{これ}、欣々女史の帯とおなじ裂れ^きれだそうです。」
とネクタイをひっぱつて見せたのを、微笑^{ほほえ}ましくこれも思出して
いた。

すると彼女はこういつていた。

「ええ、ええ、たいへんでしたわ。おいしいおいしいって食^{たべ}てしまつてから、たねを明^{あか}すと、嗽^{うが}いをなさるやらなにやら——」

介^{かいぞえ}添えに出ている、年増^{としま}の気のきいた女中が、その時の様子を思い浮べさせるように、たまらなくおかしそうにふうツといつて、袂^{たもと}で口をおさえた。

食後はもうひとつの広間へ移った。そこはばかに広かった。琴が、生田流いくたのも山田流やまだのも、幾面も緋毛氈ひもうせんの上にならべてあった。三味線しゃみせんも出ている。

「こちらに、近衛家このえけからか出た大層お古い、名箏めいそうがあるよう
うかがっておりますが——」

と、はじめて浜子が声を出した。

「ああ、あれ御承知？　すぐ出させましょう。」

パチパチと手を打った。女中たちが顔を出した。浜子はちいさな声で、

「その箏ことでなんか弾ひいて見ましようか、真つ黒になつて、
節しみたいかな古い箏ねだけれど、それは結構かな音ねを出すの。」
鯉かつぶ

虫の好い話で、浜子は他人さまの名器でよき曲を、わたしの耳に残してくれようというのだ。わたしも横道にも、

「やってよ、箏爪はなくなつて好い。」

「いえ、それはあるにはある。」

浜子は、何処からか、たしなみの箏爪の袋を出した。なるほど鯉節のように黒く幅のやや細い箏の琴が持ち出されると、膝に乗せて愛撫した。毛氈の上では華やかに、もうはじまりでした。お相手の弾手や三味線の方の女も現れて来て、琴の会のような賑しいことになっている。

鼓の箱も運び出されて来た。鼓と謡は堂に入っているといわれている彼女だった。

「おやおや、この分では、仕舞^{しまい}まで拝見^しするのかもしれない。」
 浜子は、むずとして、軽く古い箏^{こと}の絃^{いと}に指を触れながら、そんなしやれを言った。

二

その名箏^{めいそう}も、あの大正十二年の大震災に灰燼^{かいじん}になつてしまつた。そればかりではないあの黒い門もなにもかも、一切^{いっさい}が^がつさ^{つさ}切^き燃^もえてしまつたのだ。軽井沢の別荘から沓掛^{くつかけ}の別荘まで夏草を馬の足搔^{あが}きにふみしかせ、山の初秋の風に吹かれて、彼女が颯^{さつ}爽^{そう}と鞭^{むち}をふつていたとき、みな灰になつてしまつた。

「ちゆう衷が、あなたならお目にかかるというから、私の部屋に寄つてよ。」

と、あの時、大囲炉裡おおいろりに、大茶釜おおちやがまをかけた前に待つていたむつむつしたような重い口の博士は諧かいぎやく諺家げんかだったが、その人も震災後の十四年に亡なくなられた。

時代ははつきりと變つてしまった。欣々女史の榮華がなくなつてしまつたからとて、彼女の才能は決してにせものではない。だが、激しい世相の転回があつた。世界的な思潮の動搖にも押しゆさぶられていた。

せわしさに、昨日きのうの人を思出していられないというふうな、世の中のみまぐるしさだつた。

ある日、浜子が来て、

「そこまで、江木えぎさんが来たのだけれど、急がしいといけなから、また来ますつて。」

「あら、帰つたの。」

あたしは惜おしがつた、それはいつぞや、帰りぎわに、淡路町の邸やしきで、静な室を二室抜いて、彼女の篆刻てんこくが飾つてあつたのを見せられた時、どれか上げたいといつたのを、またの時にと急いで帰つたばかりに彼女の篆刻は、あすこに並べてあつただけは、一ひ個も残らず焼失したことおしの惜おしさを、なぐさめてあげたい思いで一ぱいだったからであつた。

欣々女史の書画——篆刻わざの技は、素人しろうとのいきをぬけて、斯道しどう

の人にも認められていたのだ。

丁度、私は牛込左内町の坂の上において、『女人芸術』

という雑誌のことにしている時だった。二階の裏窓から眺めると、谷であつた低地を越して向うの高台の角の邸に、彼女は越して来ていた。浜子もあまり遠くないところに移つて来ていた。

「もう直に、練馬の、豊島園の裏へつくつた家へ越すので『女人芸術』のと、あなたのと判をこしらえてあげたいつて。」

そういうつた浜子は、何処かさびしげだった。自分も、横浜のとても好い住居も若い時から造らせた好い箒も、なにもかも震災の難にあつて、命だけたすかつた、身に覚えのある痛手なので、

「江木さんもさびしいでしょうよ。」

と、たった一人の孤独なので、此処まで来るにも、手提げを二ツ、鍵かぎやら銀行の帳面やら入れてさげてこれは大切だといったと語つた。あの女性ひとが——と、聴くものも、いうものも、ただ顔を見合つた。また、その次だった。もうその時分には、練馬の新築に越していたのだが、

「江木さんところから今朝けさ、真新らしい萌黄もえぎから草くさの大風呂敷おおぶろしきづつみ包つみがとどいたから、何がこんなに重いのかと思つたらば、土のついた薩摩芋おいもで。」

と、浜子はおかしがりながら、何か気にかかるふうでもあつた。

それから間もなく、彼女は自殺したのだ。昭和五年の二月二十日、京都の宿で、紋服を着て紫ちりめんの定紋じょうもんのついた風呂呂

敷で顔を被おほつて、二階の梁はりに首を吊つつていた。

彼女は、愛媛えひめ県令せき関氏のおとしだねで、十六歳の女中の子に生れた。明治十年の出生であつたが、もの心づいた時は、京橋区木こ挽町びきちょう、現今いまの歌舞伎座の裏にあたるところの、小さな古道具屋が養家だつた。後のちに、養母やしなのおやは、江木家へ引きとられていたが、養家では、生みの男の子にはかざりしよく銚職おぼぐらいしか覚えさせなかつたが、勝気えいこな栄子には諸芸を習わせた。

新橋おしやくに半玉おしやくに出たが、美貌びぼうと才能は、じきに目について、九州ぶげんしやの分限者ぶげんしやに根引きされその人しにに死別しにれて下谷講武所したやこうぶしよからまた芸妓げいしやとなつて出たのが縁で、江木衷博士夫人となつたのだ。

関家が東京に住み、令嬢のませ子さんが第一女学校に通学してい

た十五の時、江木衷氏の夫人はあなたの姉さんだといつてると知らせてくれた友達があつて、それが逢うきつかけとなつた。けれど、もう父の関氏はこの世の人ではなかつた。

今年の二月二十日、わたしはふと、ませ子さんに欣々さんの死ぬ前の様子がききたくなつた。二、三日たつて、相州片瀬そうしゅうかたせの閑居に、ませ子さんの室へやにわたしは坐つた。

ませ子さんも、清きよかた方画伯つぎしがしが「築地河岸の女」として、いつか帝展へ出品した美しい人である。病後とはいえ、ふと打ちむかつた時、欣々さんにこうも似ていたかと思うほど、眼と眉まゆがことに美しく、髪が重げだつた。この女ひとが、大学出の子息うそが二人もあつて、一人は出征もしていられるときくと、嘘うそのような気のするほ

ど、古代紫の半襟はんえりと、やや赤みの底にある唐繻子とうじゆすの帯と、おなじ紫系統の紺めしほいお召の羽織がいかにも落ちついた年頃の麗々しさだった。

「姉は惜おしい人でしたわ、育てかたと、教育のしようでは河原かわはらみさ操おさんのようなお仕事をも、したら出来る人だったと思います。

死ぬのなら、もつと早く死しなせたかった。あの通りの華美はでな氣象ですもの。あの人の若いころって、随分異性をひきつけていました。私をはじめ淡路町へいったころは、毎晩宴会のようでした。あつちにもこつちにも客あしらいがしてあつて——江木の権ち力からと自分の美貌からからだと思つていたから。だから顔が汚なくなるということが一番怖わい、それと権力も金力も失いたくない。それ

が、震災で財産を失したのなくと衷あにに死なれたのと年をとって来たの
とが一緒になつて、誰も訪ねて来なくなつたのが堪たまらなかつたら
しいのです。よく私に、夫に死なれて後誰のちも来なくなつたかと聞
きました。お姉さまの周囲まわりの人と、私の方の人とは違うから、私
の方は今まで通りですというと、変ほかに考え込んでしまつて——財
産がすくなくなつたつていつでも他ほかのものなら結構立派に暮して
ゆけるだけはあつたのですし、今思えば、京都の方へ旅行するか
ら一緒に来てくれないかといいました。そんなこと言つたことの
ない人でしたが、よつほどさびしくなつたのだと見えて、練馬ねりまの
宅うちには離れも二ツあるから、一緒に住まないかとも言いました。
二男を子に出来ないかともいいました。けれどあんな気象の人で

すからどこまで本気なのかわからないので誰も本気で聞かなかつたので、あとでは強い人があれだけいったのには、いうに言えな
いさびしさがあつたとは思いましたけれど――

そうそう、よく死ぬのは何が一番苦しくないだろう。 くびくくり 縊 死

が楽だというけれどというので、いやですわ、涙はなを出すのがある
といひますもの、水へはいるのが形骸かたちを残さないで一番好いと思
うと言ひますと、そうかしら、薬を服のむのは苦しいそうだね。と

溜息ためいきをついたりして、変だと思つた事もあつたのですが、大阪

へいつても死ぬ日に、たつた一人で住すみよし吉へお参詣まいりに行くといつ

て、それを止めとたり、お供ともがついていったりしたら大変機嫌がわ

るかつたのですつて、それから帰つて死んだのですが、あとで聞

くと、住吉は海が近いのですつてねえ。」

わたしは静にきいていた。故衷博士ちゆうがこの姉妹はらからふたりを並べて、ませ子は部屋で見る女、栄子は舞台で見る女といったというのが、わたしは、老年の衷氏の前にいる欣々女史は孫、もしくは娘のような態度で無邪気そうに甘えていたことを言つて見た。

ませ子さんは言う。

「姉は利口でしたものね、氣むずかしい方かたに、実によく勤めていました。」

衷氏が歿なくなつた時のお通夜や、仏事の日などは、ありとある部屋に、幾組といつてよいかわからぬほどのお客をして接待した欣々女史、その新盆にいぼんには、おびただしい数の盆燈籠ぼんどうろうを諸方か

ら手向たむけられたのを家中の軒さきから廊下から室へやのなか内の天井へ
ずっとかけつらねさせたという、豪華なことのすきな彼女が、練
馬の新築の家では、夜になるとピンピン、キシキシと、木材のひ
われる音に神経を悩まして、いやだというように弱くなってしま
ったとは、美貌の誇りと、栄華の夢のさめぎわの、どんなにさび
しいものかという底に、それよりほかの根はなんにもないであろ
うか？ あたしは否いいえといたい。

それは派手な気質もあつたであろうが、あれだけの珍しい才能
の人に賑にぎやかしにばかり反それていった一面も見なければならぬ。
あたしははじめてあつたあの宵節句よいぜつくの晩の感想を、こんなふう
に書きつけてある。

——まだ春寒い夜更よふけの風に吹かれて門を出ながら、しみじみと、この華やかな人の心のかげに潜む、どうしても払うことの出来ない、人世の果敢はかなさというものについて考えさせられた。

そしてまた想おもつて見た。真の幸福をつかむものには寂しさがあろうかと——。

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年12月16日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「婦人公論」

1938（昭和13）年4月

初出：「婦人公論」

1938（昭和13）年4月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

江木欣々女史

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>